

伊沢エイに関する研究 (2)

山 田 敦 子
田 川 典 子

はじめに

「伊沢エイに関する研究(1)」¹⁾では、「教育者への歩みへ」を第1項とし、体育指導者への道へ足を踏み入れることになったエイを、姉藤村トヨとの関わりから述べた。また、「2.ダンス理念の確立へ」では、欧州留学(昭和3年11月5日～昭和4年3月2日)を契機に、『ダンスの基本的原理は自然運動である。』ことを確信したのである。これに、昭和6年～39年までの33年間に、エイが創作した作品一覧表を加え、その卓越した創造性と豊かな情緒を浮彫にした。

このように、(1)においては「伊沢エイ」についての概観を述べた。

さらに、エイのダンス理念確立の基点と思われる留学を重視し、本稿では昭和3年11月～昭和4年3月の欧州留学、特にドイツでの勉学についてまとめる。

1. 留学スケジュール

昭和3年11月5日、エイは東京駅まで東洋高等女学校や体操音楽学校の生徒及び関係者に見送られ下関へ出た。同日午後11時に下関を出航しドイツへ向かった。シベリア鉄道にて2週間かかりベルリンへ到着。一足先に出発していたトヨの出迎えを受けたのである。

5日下関出航－6日午前8時釜山着、9時30分発－6日午後7時40分京城着－7日午前8時30分安東着－7日午後2時奉天着、3時15分発－7日午後11時44分長春着－8日午前8時ハルビン着、午後9時発－9日満州着－10日チタ着－11日イルクーツ着－12日クラスノヤルスク着－13日ノヴォシビルスク着－14日スヴェルドロフスク着－15日ヴィアトカ着－16日午前9時15分モスクウ着－17日ポーランドのストルプツェ着－18日午前9時ベルリン着。

ベルリン到着後、19日から25日までは、長いシベリア鉄道の旅の疲れを癒やすことに専念された。当時のエイの日記には、「11月23日、姉ハ私ノ健康バカリ心配シテ未ダ研究ニハカカラセテ呉レヌ。」²⁾と記されている。

26日、文部省へ体育の学校の参観許可をもらいに行くが、手続きが困難で果たせず、現在ならば、日本を出発する前に行われる準備が、この頃は当地へ行ってから予定をたて手続きをしたらしい。大使館の参観手続きを終了したのは、従って、12月に入ってからであった。

主に、昼間は各学校を参観し、自然体操とダンス、体育設備と実際の現状を観たのである。カルマイエル(Hedwig Kallmeyer)、メンゼンディーク(Bess Mensendiek)、ローエラ

ント (Loheland) など、当時のドイツの女性体育に、大きく貢献した女史らの学校を視察した。

昭和3年11月29日(エイがベルリンで研究し始めた日)から昭和4年2月10日まで、約70日間のベルリン滞在では、一日に平均2つの学校のレッスンを受けている。〈表1参照〉

その他に、各教室の授業の根本が自然運動であることを感知したエイは、夜はボーデの書物解説を理解するため、ドイツ語の家庭教授を受けている。

また、向学心に燃えるエイは、夜はオペラ、音楽会、舞踊公演と時間の許す限り、劇場へ通ったのである。研究熱心のあまりとはいえ、過密な研究スケジュールを消化しながら、更に劇場へと向かわせるものには幼少の折、母に連れられて芝居見物に行った頃の魅力が多少ともその原動力になっていると考えられる。

11月30日、カルマイエルのギムナステーク³⁾を見学する。〈表1参照〉また、裸体体操の指導も受けた⁴⁾。

ローエラントでは、毎週木曜日1時間授業を参観した後、実技を受けた。

メンゼンディークの学校では、金曜日午前9時半から11時まで授業を参観し、11時から12時の1時間実技を受けた。

ボーデの所は、時間の許す限り授業を受けた。

ウィグマンの学校については、1週1度夜学で授業を受け、毎週月曜日ウィグマンから講師を派遣してもらい、自宅特別指導を受けた。その他は、時間の許す限り見学に行った。夜学でダンスを学ぶのは、1ヶ月8マルク(約2,000円)、家庭教授については、1時間8マルクであった。

その他、ウーランドストラッセの小学校視察、ドロテヤシュミットの授業参観、社交ダンスの教授も受けたのである。

昭和4年2月11日より、気分転換のため⁵⁾パリとロンドンに行く。

11日から18日までをパリで過ごす。ここでは、軍の学校と女子高校生の授業を参観し、また、女子の体操とダンスの実演会を観たが、体育については満足は得られなかった。

さて、19日から22日までのロンドンにおいては、フォークダンスの指導を受け、ダルクローズの学校、オスタパークを見学した。

エイはフランス、イギリスの体育の実状を見てドイツの体育を見直したのである。そこで、1日でも多くドイツで研究しようと、当時予定していた日時を繰り上げ、22日にロンドンを立ち、23日にはパリに、24日には再びベルリンに戻った。そこで、3月2日の帰国までを過ぎた。

2. 当時のドイツに於ける女子体育

19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツの体育界は、メンゼンディーク、カルマイエル、メンツレル(Dora Menzler)、ローデン(Hedwig von Rohden)、ランガート(Louise Langgard)、シュラーホルスト、アンデルセン(Hedwig Andersen)、ファルク(Elin Falk)という8女史に加え、舞踊家のダンカン姉妹(Isadora Duncan, Elisabeth Duncan)とウィグマン(Mary Wigman)らが活躍していた。すべてが女性である。

従来の女子体操というのは、ほとんどが男子の模倣であったが、これらの女性が女性のための体育の発見に努め、男性による誤った体操法から独立、脱離することに成功した。その結果、女性に一番適当とされたのは、表現体操と舞踊であった。女子体操はこの方面に発展し、内面の啓示によって美の追求が行われていく。

ナチス政権確立後、国策として積極的な母性保護に乗り出し、特に女性の健康に重きを置いた。これは民族の死活問題として取り上げられ、個人の健康というより、国家が規約を設けてすべての女性に体育訓練を施さねばならぬ。というところが主眼であり、女子の体育は重大なものであった。

3. ドイツ・ギムナスティーク連盟

19世紀の初頭ヤーン(Friedrich Ludwig Jahn 1778-1852)が国事犯の嫌疑で捕えられ、ツルネンTurnen が政府に受け入れられなくなった。その結果、政策的に行われるようになったのはギムナスティークGymnastikであり、教育的な目的に役立つのはギムナスティークにおいて他にないと宣伝された。

体育界において、元来融和統一されるべき3つの要素、ツルネン、スポーツ、ギムナスティークの調和を計るための会議⁶⁾が開かれたのであるが、出席者が非常に少なかったため、調和を計るには及ばなかった。

1925年、「ドイツ体操連盟」⁷⁾はライプチヒにおいて「ドイツ女子体育会議」を開いたが、伝統を固執する古典派に妨害された。

1926年、ボーデ(Rudolf Bode)、ラバン(Ludolf von Laban)、ローエラント、カルマイエル、メンゼンディークらは、「ドイツ・ギムナスティーク連盟」を設立した。この連盟の代表者は高等学校参事官ヒルカー(Hilker)であった。

同年、デュッセルドルフで「体育的身体陶冶会議」が開かれた。体操と競技がはっきり区別され、名称も「律動体操」から「純粹体操」(ライネギムナスティーク Reine Gymnastik)となった。

「ドイツ・ギムナスティーク連盟」の主張は、試合の勝敗より体操の原動力を喜悦に置いた。

4. 各学校について

ここでは、エイがドイツで指示した教師及び学校の特徴を簡単に述べる。

・カルマイエル

女性体育家である。

1908年、アメリカからドイツに帰った彼女は男女の身体の調和、運動美の育成、日常生活、舞台、音楽、その他あらゆるものの塑像としての肉体の訓練を主張した。

1. 調和的姿勢は、典雅な緊張による自然な重心の位置による。
2. 抵抗運動は、姿勢の多様性による四肢の自由な運動による。
3. 運動の連続は、正しい点から出発する⁸⁾。

カルマイエルの授業は、30人位の生徒で行われ、半裸の生徒に解緊運動を指導する。

エイは、カルマイエルの学校について、「日本ノ体操トハ余程変ッテイル。」⁹⁾と感想を述べている。これまでのエイの運動経験の中には、背中を丸くしたり、力を抜いたりすることはなかった。当時の日本でも、男性の裸体体操は見たことがあっても、女子が全裸で体操をするなど思いも及ばぬことであり、少なからず困惑したようである。

・メンゼンディーク

女性体育家である。アメリカで研究を重ねドイツに戻る。

「今日努力している如き意に於ける体育は殆んど人間の身体の運動機械学によってなされている。」¹⁰⁾というのが、彼女の定義である。「家事に於いて、その影響は直ちに身体の下部機関の衰弱、腰曲り、吐血等をまき起す。然るに、もし我々が身体機械の機関長となって身体を支配することができるときには、かかる疾病は恐らく免れ得るであろう。」¹¹⁾つまり、もっとも重要な身体の訓練は日常の生活運動にあり、正しい解剖学、生理学の知識を得て訓練を行うことを主張した。

メンゼンディークの授業はこのように、まず、機械的な肉体について理解することである。次に、肉体と精神の結びつきにより、己にしかない呼吸法を発見させるのである。

メンゼンディークは、女性の体育について合理的な保健術を発見した最初の女性であり、保健体操で知られている。

・ローエラント学校

ローデンとランガートの2人の名前を結び合わせて、学校をローエラントと名づけた。

2人とも女性体育家である。

ローエラント学校は、女生徒のみを対象とし、その趣旨は「自由意志による体育教育である」そこで、指導者は命令者にはならず、あくまでも助言者となる。

「人間の意志を自由に開発させ、体操を人間開発の手段として用いる。」ことが学校の目標である。

・ボーデ

ボーデは音楽家であるが、新しい体操から舞踊に近づき、表現体操を提唱し、運動のリズムの研究を行った。

ボーデの表現体操とは、表現の意味が、人間の内面にある感情——たとえば喜びとか、悲しみとか、怒りとかという感情を表情という形態において表現する、ということではない。常に運動において呼び起こされ、運動の形式によって起こった感情がボーデの表現の意味である。つまり、歩行運動、走運動、手で物を押すような運動、打撃する運動、身体を屈げるような運動のように最も簡単な自然の動き及び運動を選択し、これらの運動が正しく実行された時、自然に運動から生ずる感情である。これは音楽によってもっと引きだされる。

この学校の練習方法は、生徒を生き生き動かせるために、皆一緒にして練習させる。ボーデは生徒が一同となって練習すればする程、生徒は個人の自然運動を発見することができると強調している。

練習内容は、1. 解緊練習、2. 振動練習、3. 緊張練習、4. 反衝(抵抗)練習、5. 表現練習となっている。

・ウィグマン

女性舞踊家であり、振付け師である。

彼女の舞踊作品は正しい方法論をもっていた。群舞の強調によって劇的舞踊空間を実現し、人間的なあらゆるものから飛躍し、神秘的世界と悪魔的世界を仮面の使用により変幻自在にした。

代表作は、「魔女の踊り」(1914年)、「人生の七つの踊り」(1918年)、「春の祭典」(1957年)などがあげられる。

ウィグマンは舞踊における大きな仕事の傍ら、体育の分野においても少なからぬ貢献をしている。

指導方法については、生徒を型にはめることをさけていたので全員を体操隊形に並べて運動させることは殆んどなかった。一週間を単位とした基本運動の習得が行われた。ある週では、「関節運動」ばかり、他の週には「歩行運動」が6日間続くのである。

訓練法の詳細を述べると、

(1) 身体の準備訓練

- ① 5人の女生徒が大きなホールにばらばらに散り短いフレーズの解緊運動をやり、次第に複雑な運動へと進んでゆく。
- ② 情緒的なもの、表現的なものへ移る。

(2) 中級＝第2級の訓練

腕、脚の動きをそれぞれ独立させながら全体の動きに統合する。

(3) 上級＝第1級の訓練

- ① 練習曲によって空間を動く練習をする。
- ② 情緒的な習作に移り、一つのコースを歩行しながら運動を表現してゆく。
- ③ デュエットの下地をつくる。それは動きを受け取り、また伝える相互交感による動きの表現である。

ウィグマンはこうした練習を静かに見守っている。一度ぐらい小声で直す場合もあるが、多くは生徒の考えをそのままにさせておく。

(4) 体 態

(5) 軽い振動による輪舞。ここでは急激な方向転換などがある。これはリズム変化に応じうる抵抗力を養う訓練をする。

(6) 結合強化へ入る。

ここでウィグマン自身がリーダーとして加わる。

(7) デモンストレーションの下稽古に入る。始めは音楽だけであり、次に音によって動きが生まれ、最後に群舞となる。

ウィグマンはこうした創作にも理論的な規則正しいコースを採用し、決して気まぐれを許さない。

5. ベリーナ劇場にて、ウィグマンの舞踊をみる¹²⁾

エイは、上述の各学校で基本運動を学び、訓練法を細かに観察しているが、ウィグマンにつ

表1 エイのスケジュール表

月日	学校名	D	K	L	M	B	W	H	S
1928									
11. 29 (木)									
30 (金)			○						
12. 1 (土)									
2 (日)									
3 (月)								*	
4 (火)									
5 (水)									
6 (木)				○*					
7 (金)					○*				
8 (土)	○								
9 (日)									
10 (月)	○							*	
11 (火)									
12 (水)							○		*
13 (木)	○			○*					
14 (金)	○				○*		*		
15 (土)									
16 (日)									
17 (月)						*		*	
18 (火)						*	*		
19 (水)						*			*
20 (木)					*				
21 (金)									
22 (土)									
23 (日)									
24 (月)									
25 (火)									
26 (水)									
27 (木)									
28 (金)									*
29 (土)									
30 (日)									
31 (月)									

○ は参観
* は実施指導を受ける

表2 マリー・ウィグマンの作品年譜(1914-1928)

年代	作 品 名	年代	作 品 名
	ソ ロ ダ ンス		グ ル ー プ ダ ンス
1914	・魔女の踊り ・レ ン ト		
1917	・小妖精の一日		
1918	・婦人のタンブラー		
1918 ~9	・オリエンタルマーチ ・恍惚の踊り ・四つのハンガリアン・ダンス ・エロイカ ・ワ ル ツ		
1920	・ポロネーズ(リスト) ・舞踊組曲(ドボルザーク) ・東洋風モチーフによる四つの踊り ・夜の踊り ・幽 霊 ・幻 影		
1920 ~23	・ダンス・リズムⅠ ・ダンス・リズムⅡ ・古典的組曲 ・スペイン風組曲 ・二つの無言の踊り ・ロシア歌曲による一連の踊り ・叫 び ・道 ・英雄的テーマによる変奏曲 ・スペイン風組曲のためのもう二つの踊り	1920 ~23	・祭 典 Ⅰ ・舞踊組曲(ビゼー) ・死の舞踊(サン・サーンス) ・グロテスク ・二つの舞踊 ・飛 翔 ・人生の七つの舞踊 ・一連の踊り
1923 ~24	・アパッショナート ・二つの舞踊家 ・二つの舞踊リズム ・最後のラブソディの踊り	1923 ~24	・単一の踊り ・舞踊劇からのシーン
1924	・タベの踊り		
1925	・スペイン風組曲のためのもう二つの踊り ・一連の「幻想」のために	1925	・グループ・ソング ・舞踊物語
1926	・祭のプレリュード ・ラブソディ・ダンス ・二つのモノトニィ ・一連の「幻想」のために	1926	・死の踊り ・空間賛歌 ・ロシア民謡とリズムのための組曲
1927	・祭典のための舞踊歌Ⅱ ・明るい振動 ・一連の「幻想」のために ・バラードⅠ ・一連の「幻想」のために	1927	・祭 典 Ⅱ
1928	・一連の「幻想」のために	1928	・祭 典

いては、特に総合芸術としての舞台を2度観賞している。日記の上からは1度しか記録がないが、その印象を

「舞台は黒幕でおおわれ、舞台装置も何もない黒づくめの舞台に先生は黒のダンス服を着けられ、何の装飾もない只先生の身体だけを照し出す照明があっただけで、その上伴奏はピアノだけ、寂しいような暗いような、ひとたび幕が開いてピアノが鳴り、伏せていられた先生が立ち上がられると同時に広い舞台も狭くなり、黒一色の舞台と踊りの美しさで、むしろ引き立てられて華やかに、その動きの立派さは拙い筆では表現はできない。世界的な舞踊家の踊りとは、観衆にこびる点の一つもなく、ひたすら芸術に生きる神のような心境であられると推察ができるのである。」¹³⁾

と述懐し、美しい表現ができるためには身体の訓練すなわち基本運動が重要なことを強調している。

さて、その時の上演作品が明らかでないところから、その年に創作発表されたウィグマンの作品をみることで推測することにした。

1928年のウィグマンの創作作品は「一連の幻想のために」というソロ作品と、群舞作品「祭典」が発表されている。〈表2参照〉12月16日ベリーナの劇場でエイが見たウィグマンの作品は、「祭典」の第3部祭典風の終結に類似している。ウィグマンのソロであり、伴奏はピアノが主体となっており、コスチュームは銀色で裾の方がゆるく広がっている。大体は似通ったものを使用するが、景によって変化することもある。このことから、「祭典」のソロ部分の印象が強烈であったと推測される。

おわりに

本稿は、欧州留学中のエイの足跡を日時を追って明らかにした。この期間中、最もエイを刺激し、自身の体操及びダンスに対する信念を確立させる鍵となるものは、ウィグマンとボーデではないかと思われる。それは、受講時間数の上からも断然ウィグマンが多く、又ボーデの書物から、その理念を体得しようとする熱意をエイの日記の行間に読みとることができる。

しかし、全受講の具体的内容については資料がなく、ただエイの「私の歩んできた道」¹⁴⁾に記されている内容に停まらざるを得なかった。

当時のドイツに於ける、体育事情からエイが受講した教師達が、全てドイツ・ギムナステイク連盟を設立したメンバーであったことから、自然運動の重要性が痛感され、その体得に全エネルギーを傾注した様子が伺える。

更に、その教師達は全て女性であったことから「女子の体育は女子の手で」の主張が確信となったことも付記しておきたい。

「伊沢エイに関する研究(1)」で誤記があったので訂正させて頂く。頁98・三行目、藤村トヨが高橋忠次郎と — とあるのを高橋キャウと訂正する。

後注

- 1) 山田敦子・田川典子「伊沢エイに関する研究(1)」, 東京女子体育大学紀要第16号, 昭和56年3月。

- 2) エイの日記より, 伊沢やゑ子「伊沢エイの生涯」, 参歩企画, 昭和56年10月31日。
- 3) *Gymnastik* グーツムーツ (*Guts Muths 1759 - 1839*) の身体練習法。
- 4) 日記には実施指導を受けたことは記されていないが, 後に書かれた「私の歩んで来た道」(学校体育8巻6号), 昭和30年6月にその様子を述べている。
- 5) エイは, 毎日のハードなスケジュールと慣れない土地の生活で神経衰弱となる。
- 6) ベルリンに於ける「芸術的身体陶冶のための会議」。
- 7) 1868年に創立され, 体操クラブと150余万の正会員を有する。
- 8) 中村秋一「ドイツ舞踊文化」, 人文閣, 昭和16年。
- 9) エイの日記より。
- 10) メンゼンディーク「女子の体育」(*Körperkultur des weibes*)。
- 11) 二宮文衛門・今村嘉雄・大石峯雄「体育の本質と表現体操」, 目黒書店, 昭和8年12月10日。
- 12) 昭和3年12月16日日曜午後7時から, ペリーナ劇場にて, ウィグマンの公演をみる。
- 13) 「私の歩んで来た道」(学校体育8巻8号), 昭和30年8月。
- 14) (学校体育8巻4・5・6・7・8・11号), 昭和30年4~8・11月。

参 考 文 献

- (学校体育8巻4・5・6・7・8・11号) 昭和30年4~8・11月。
- 伊沢やゑ子「伊沢エイの生涯」 参歩企画 昭和56年10月31日。
- 中村秋一「ドイツ舞踊文化」 人文閣 昭和16年。
- 二宮文右衛門・今村嘉雄・大石峯雄「体育の本質と表現体操」 目黒書店 昭和8年12月10日。
- マリー・ウィグマン著, 河井富美恵・林悦子訳「舞踊の表現」 昭和51年2月20日。
- 邦正美「舞踊の文化史」 岩波書店 昭和43年10月20日。